

表記辞典について

武 部 良 明

1. 考察の観点

ここでいう表記辞典とは、言葉を文字や符号で書き表す場合に用いることを目的に編集した辞典のことである。一般に何か書こうとする場合、すらすらと正しく文字化できれば問題がない。しかし、時には、言葉が頭に浮かびながら、それをどのような文字で書いたらよいか、疑問に思うことがある。そういう場合に役立つのが、表記辞典である。

この場合、一般に規範とされているのが、当用漢字表・現代がなづかいに始まるいわゆる現代表記である。ところが、この現代表記というのは、次々と制定され、積み重ねられてきたものである。そのうえ、例えば、当用漢字音訓表とか送り仮名の付け方などは、一度告示されたものが後に改められている。それにもかかわらず、覚えた表記はそのまま用いられ、書かれた表記はそのまま残るのが実情である。したがって、自分の覚えたとおり用いることが、必ずしも正しくはないのである。目に触れる表記をそのまま用いることも、時には誤りとなるのである。

そこで、規範的な現代表記に基づいて正しく書こうとする場合には、どうしても表記辞典を絶えず参照することが必要である。それは、表記辞典というのが、もともとそのようなことを目的に編集されているからである。そればかりでなく、表記辞典は、教育の立場でも大いに活用できる辞典となるのである。それは、表記辞典が、日本語の表記の上で特に問題になる事柄、特に注意すべき事柄を積極的に取り上げ、それらについて詳しい解説を加えているからである。

以下、表記辞典について、どのような内容が盛り込まれているかを取り上げるのも、このような観点に立っての考察である。そうして、このような観点からの考察が、同時に表記指導の要点につながるというのが、筆者の考えである。

2. 個々の漢字について

表記辞典の内容として第1に目に付くのが、個々の漢字を扱った部分である。これについては、字体、読み方、意味、用例などが取り上げられている。

まず、漢字の字体であるが、新字体が旧字体との対比で示されている。新字体というのは、「当・旧・体」など、当用漢字字体表に掲げられた字体である。それに対し、「當・舊・體」など、それ以前に用いられていたのが旧字体である。これらのうち、現代表記として用いるのは、もちろん新字体のほうである。それにもかかわらず旧字体を併せ掲げるのには、二つの理由がある。一つは、旧字体で教育を受けた人にとって、このほうが好都合だからである。このように新旧が対比されていれば、旧字体を頼りに新字体を確かめることができるからである。もう一つは、誤って旧字体が書かれている場合に、それを見分ける上でも好都合だからである。このような混同は、特に「次・次、朝・朝、旅・旅」のようにその異同がわずかな場合に多く見られるが、両者が対比されていれば、新旧いずれの字体かの判断も容易になるからである。

しかし、字体の対比が必要なのは、このような新旧字体の異同に限らないのである。それは、新字体相互の異同の確認にも必要だからである。例えば、「専・恵・穂」と「博・薄・簿・縛・敷」の場合がこれである。こういう場合には、点の有無が問題になるこというまでもない。「券・勝、図・悩、寿・麦」のような類似部分も、同じく新字体相互の異同である。また、同じく新字体でありながら、活字体と筆記体との間に見られるのが、次のような異同である。

入・入 七・七 言・言 北・北 令・令 近・近

これらのうち、筆記体のほうの標準を定めたのが小学校学習指導要領の標準字体であるが、そこでは「戸・言、耳・取、幸・報」などの類似部分のように、微細な異同も問題になるのである。

次に、漢字の読み方であるが、その目安を定めたのが当用漢字音訓表である。これによれば、例えば「学」という字の場合、「字音ガク・字訓まなぶ」と掲げられている。しかし、これをもとに、現代表記に用いる「学」の読み方を「ガク・まなぶ」だけだと考えてはならないのである。それは、「学問」の場合に「ガク」でも、「学校」の場合に「ガッ」となるからである。¹⁾「まなぶ」のほうも、動詞として「まなば・まなび・まなぶ・まなべ」と活用するだけでなく、可能動詞として「まなべ・まなべる・まなべれ」とも活用するわけである。また、字音・字訓を通じて頭音の濁音化・半濁音化が見られること、これも周知のとおりである。さらに、人名、地名の場合は、当用漢字音訓表の対象外である。そうして、これらすべてにわたって詳しい情報を与えてくれるのが表記辞典である。

ところで、漢字の字訓は、その漢字の意味に当たる日本語が読みとして固定したものである。しかし、その意味に当たる日本語のすべてが字訓として用いられるわけではない。例えば、「学」の場合に次の三つの意味が見られるが、このうち字訓として固定したのは「まなぶ」だけである。

学 ①まなぶ……学生 学者 学問 学校 小学校 独学

②がくもん……学部 学説 学会 語学 物理学

③がっこう……学長 学籍 入学 在学 休学 退学

「学」という字がこの三つの意味を持つということは、「学」を含む漢字音読熟語を理解するのに役立つではないのである。それは、この種の熟語の意味が、基本的にはそれを構成する個々の漢字の意味の複合から成り

1) この種の促音化は、「石器(キ→ッ)・楽器(ク→ッ)・日記(チ→ッ)・筆記(ツ→ッ)」などに見られるが、当用漢字音訓表の一覧表には掲げられていない。ただし、「合併(ゴウ→ガッ)・早速(ソウ→サッ)」などの「ガッ・サッ」は、特別なものとして掲げられている。

立っているからである。このことは、漢字音読語の表記を記憶の中に安定させるためにも大いに役立つのである。表記辞典が漢字の意味を取り上げるのは、理解のためではなく、表記そのもののためなのである。

なお、表記辞典が掲げる漢字については、現代表記という立場からの記号づけが行われている。当用漢字表に掲げられている漢字が表内字、それ以外が表外字である。当用漢字音訓表に掲げられている音訓が表内音訓、それ以外が表外音訓である。小学校6年間の課程に割り当てたのが教育漢字881字と備考漢字115字²⁾を合わせた996字であり、これらについては学年別配当も定められている。その他、新たに生まれる子の名に用いてもよいとして追加したのが、人名用漢字別表の92字と、人名用漢字追加表の28字である。また、当用漢字表そのものの補正を意図した当用漢字表補正資料(削除28字、追加28字)が新聞社等で採用されている。そうして、これらすべてについて記号を定め、それを個々の漢字に添えてあるのも、表記辞典の特色の一つである。現代表記としては、これらの記号を頼りに漢字を用いることが必要だとされているからである。

3. 書き誤りやすい表記

表記辞典としては、表記について正しい形を掲げなければならないこと、いうまでもない。その場合、表記辞典の掲げ方の中には、単に正しい形を掲げるだけでなく、書き誤りやすい形を併せ掲げる場合も見られるわけである。

この場合、書き誤りやすい形と考えられるものには、大きく分けて二つの場合がある。一つは文字そのものを誤る場合であり、もう一つは文字の用い方を誤る場合である。例えば、「せんもん」という語の表記であるが、

2) 備考漢字というのは、昭和43年の小学校学習指導要領において学年別漢字配当表の備考欄に掲げられている115字である。この115字は第6学年において読みだけを指導することになっていたが、現行の配当表(昭和52年版)では第6学年の分に組み込まれている。なお、43年版で1学年ずつ繰り下げて読みだけを指導するようになっていた*印付きの漢字も、それぞれ繰り下げた学年に組み込まれている。

「専」という文字の右上に点を打つのは、文字そのものの誤りである。「門」の部分で「問」と書くのは、文字の用い方の誤りである。ただし、表記辞典が扱うに当たってこの二つの誤りやすい形をそのまま「専門」の項に示すわけではない。文字そのものの誤りのほうは、個々の漢字の誤りに属するからである。同じ誤りは、「専用・専心・専念」などに共通して現れるはずであり、「専」の項で取り上げれば十分である。³⁾ これに対して、「専門」を「専門」と書く誤りは、「門」の項でなく、「専門」の項に併せ示しておくほうが好ましいわけである。表記辞典が「せんもん」の項で「専門(×問)」のような掲げ方をするのはこのためである。この種の掲げ方が漢字音読熟語の場合に特に多いこと、次の例に見るとおりである。

専門(×問) 応対(×待) 解熱(×下) 名義(×儀)

こういう語の場合に、書き誤りやすい形を併せ掲げるのが、表記辞典の行き方である。⁴⁾

ところで、この種の漢字音読熟語の中には、旧表記において誤りであった形を正しいとしたものも少なくないのである。例えば、「こんてい」というのは「根柢」と書くのが正しく、「根底」は誤りである。それにもかかわらず表記辞典には、「根底(根柢)」のように掲げられている。その理由は、当用漢字表の審議に当たって、同音で意味の似た漢字の場合に、その一方だけを採用し、他はそれに書き換えることを意図したからである。こうして行われるに至ったのが、次のような「同音の漢字による書きかえ」である。

根底(根柢) 活発(活潑) 交差(交叉) 衣装(衣裳)

これが、表記における新旧の対応である。そうして、表記辞典がこういう場合に新旧両表記を併せ掲げるのも、字体において新旧を併せ掲げるのと

3) この種の誤りは、類似の他の字体(「専」の場合は「博」)との混同によるものが多い。ただし、初歩的な字画の誤りは、表記辞典の対象外である。

4) この種の誤りも、類似の他の熟語の場合との混同によるものが多い。ここの例示で見ると「専門・学問、応対・接待、解熱・下剤、名義・礼儀」などの混同が考えられる。ただし、初歩的な混同は、表記辞典の対象外である。

同じ理由によるわけである。

なお、当用漢字表の施行にともなって、同表に掲げられていない漢字を含む語の場合に平仮名書きの行われる場合があること、次の例に見るとおりである。

あいさつ(挨拶) あっせん(斡旋) いちず(一途)

こういう場合、現代表記としては平仮名書きのほうが正しいのである。そうして、表記辞典が新旧の表記を併せ掲げるのは、これも新旧字体の場合と同じ理由によるわけである。

ところで、誤りやすい表記そのものは、漢字音読熟語の場合だけではなく、漢字訓読語の場合にも見られるわけである。例えば、次に示すような場合がこれである。

相棒(×合) 相身互い(×見) 跡形ない(×方) うるき型(×方)

また、当用漢字表に掲げられていない漢字の訓読によるもの、当用漢字音訓表に掲げられていない字訓によるものが平仮名書きになること、次の例に見るとおりである。

そろえる(×揃) かばん(鞆) つらい(×辛) おのずから(×自)

こういう場合も、現代表記としては平仮名書きにする書き方が正しいのである。

なお、音読の漢字で書き表す語、訓読の漢字で書き表す語というのは、語の種別からいえば、漢語と和語である。しかし、書き誤りやすい形そのものは、外来語の場合にも見られるのである。次に掲げるのは、このほうの例である。

チフス(×チブス) データ(×データー) コピー(×コッピイ)

該当例は少ないが、新旧の対応も、次のような片仮名書きに見るとおりである。

インク(インキ) ガレージ(ガレーヂ) ウイスキー(ウィスキー)

その他、漢字書きが片仮名書きに改められていること、これも次の例に見るとおりである。

ビール(麦酒) ガス(瓦斯) たばこ(煙草)⁵⁾

このような場合にも、表記辞典は新旧の形を併せ掲げているわけである。

4. 書き分ける表記

正しい表記という立場では、個々の漢字の面と個々の語の面が問題になること、以上のとおりである。しかし、表記辞典として見た場合にこれだけで十分かという点、決してそうではない。同音語の多い日本語の場合には、表記というものをもう一つ別の面から取り上げる必要に迫られるのである。それが、書き分けという面である。そうして、同音部分の書き分けについて特に詳しく取り上げるのが、表記辞典の特色である。

問題は、どの範囲の書き分けが表記辞典の対象かということになるが、あまり初歩的な書き分けは取り上げないのが一般である。例えば、次のような書き分けは、表記辞典に掲げられていないほうの例である。

(1) 木の箱 気が付く 黄色 来ます 着ます

(2) 階・回 嬢・場 第・大 半・反

(3) 楽器・学期 急行・休講 政党・正当

その理由は、漢字がそれぞれ意味を持っているとともに、これらの書き分けがいずれもその意味に基づいているにすぎないからである。「キの箱」というときにどの「キ」を書くか、「向こうから人がキます」というときにどの「キ」を書くかは、書き表そうとする語の意味と漢字「木」「来」の意味から考えて明らかであり、迷うことはないのである。同じことは、「階」と「回」、「楽器」と「学期」についても言えるわけである。

それならば、どのような場合が表記辞典の対象となっているかということであるが、それは、要するに、進んだ段階においても迷う書き分けであ

5) 「たばこ」が平仮名で書かれるのは、その使われ始めた歴史が古く、国語に融合しきっていて、国民一般がこれを外来語とは思っていないからである。「かっぱ・かるた・さらさ」などもこれに当たる。このことは、国語審議会報告「外来語の表記」のまえがきでも取り上げられている。

る。例えば、「体制」と「態勢」の場合がこれである。一般に文章を書いているとき、「タイセイ」という語が頭に浮かび、それを文字化しようとしたとする。その場合に「体制」か「態勢」かの書き分けは、この二つの語の意味・用法が似ているために、迷うことが多い。そういう場合に、表記辞典の掲げる次のような指示が役に立つのである。

体制 システム 研究の体制 資本主義体制

態勢 ポーズ 受け入れの態勢 準備態勢

表記辞典が取り上げる同音語の書き分けは、この種の同音類義語に限られるのである。すなわち、次のような場合がこれである。

体制・態勢 解答・回答 実体・実態 開放・解放

この種の書き分けの中には、同じような意味でありながら分野によって異なるものがあること、次の例に見るとおりである。

成長(動物)・生長(植物) 定石(囲碁)・定跡(将棋)

配列(一般)・排列(図書館)

また、熟語の中で紛らわしいものもあること、次の例に見るとおりである。

絶対・絶体絶命 前後・善後策 課外活動・科外講義

これらは、進んだ段階においても迷うことの多い書き分けとして紛らわしいのである。

以上は漢字音読熟語の場合について見たのであるが、同じような書き分けは、漢字訓読語としての異字同訓にも見られるわけである。もちろん、異字同訓の場合も、次のような初歩的な書き分けなどは、表記辞典の対象外である。

買います・飼います 誤る・謝る 熱い・厚い

しかし、「熱い・暑い」のほうは表記辞典の対象であり、次のような指示が役に立つわけである。

熱い ↔ 冷たい 湯が熱い 体が熱い 熱い空気 熱いご飯

暑い ↔ 寒い 気候が暑い 日ざしが暑い 暑い日 暑い地方

表記辞典が取り上げる書き分けは、この種の紛らわしい異字同訓である。

すなわち、次のような場合がこれである。

熱い・暑い 遠い・早い 伸びる・延びる 交ぜる・混ぜる

折り込む・織り込む 引き伸ばす・引き延ばす

この種の書き分けの中には、漢字と仮名の書き分けも見られること、次に示すとおりである。

捕らえる・とらえる(捉) 書く・かく(描) 歌・うた(唄)

この場合は、「捉」「唄」が当用漢字表に掲げられていないためであり、「描」に対する「かく」という字訓が当用漢字音訓表に掲げられていないためである。しかし、それらに掲げられている場合にも、次のような書き分けが行われているわけである。

来る・見てくる 流れ出す・流れだす 時・とき 所・ところ
同じ語でも助動詞や助詞に準じる用い方の場合に仮名書きとなるのが、現代表記の行き方だからである。

なお、表記辞典が取り上げている書き分けは、以上のような漢語や和語だけでなく、外来語にも及んでいるわけである。次に掲げるのは、このほうの例である。

ホーム・フォーム バレー・バレエ ボーリング・ボウリング⁶⁾

また、語の一部として紛らわしいものもあること、次の例に見るとおりである。

アルミニウム・ポリウム ハイウエー・ミッドウエー⁷⁾

この種の書き分けについて特に注意をさせようというのが、表記辞典の行き方である。

6) 穴明けの boring がボーリング、遊技の bowling がボウリングとなる。後者については初期においてボーリングの形も用いられたため、現在でも遊技場や工場名にこれを用いたものも見られるが、日本ボウリング協会や日本ボウラーズ連盟などに「ボウ」の形が用いられるため、ボウリングのほうが標準と考えられている。

7) このような異同が見られるのは、一般語としてのハイウエーが国語審議会報告「外来語の表記」に従い、地名としてのミッドウエーが教科書研究センター「地名表記の手引」(文部省「地名の呼び方と書き方」を改定したもの)に従うからである。その他、この両者の異同については、特に注意が必要である。

5. 統合する表記

漢字というのは、それぞれ意味を持っている文字である。したがって、それを組み合わせて構成する漢字音読熟語の場合、漢字が異なれば別の意味が生まれるはずであり、意味が異なれば書き分けの対象になるはずである。ところが、表記辞典としては、これらをすべて書き分けるのではなく、そのうちの一部について一方に統合する場合も見られるのである。例えば、「基準」と「規準」を「基準」に統合し、「基準(規準)」のように示すのがこれである。

二つの異なる表記について統合を必要とするのは、集団による分担執務が行われている場合である。その場合に、同じような意味で A の人が「基準」と書き、B の人が「規準」と書くことが起こるとすれば、全体として統一のある表記の紙面が成り立たないからである。このような事情は、「探検・探険」など表記のゆれと考えられている場合において特に必要である。そうして、表記のゆれの場合には、一般の国語辞書も同じ見出し語の下に併記していること、次の例に見るとおりである。

探検・探険 年配・年輩 独習・独修 十分・充分

このようなゆれは、新しい表記と古い表記との間にも見られること、次の例に見るとおりである

栄養・營養 独特・独得 記念・紀念 理解・理会

また、「同音の漢字による書きかえ」の中にも、この種の統合が見られるのである。

先端・尖端 記章・徽章 尋問・訊問 洗淨・洗滌

旧表記において書き分けていた「列の先端」「塔の尖端」がいずれも「先端」と書かれることは、この種の統合にほかならないのである。しかし、集団執務の行われている場合には、これらの統合が「基準・規準」にも及んでいるわけである。

この場合、「基準」というのは「基礎となる標準」の意味であり、「規準」というのは「規矩準繩」の略で、「手本となる標準」の意味である。しか

し、実際問題としてこの二つの語の間にどのような意味の違いがあるかという、必ずしも明らかではない。そのため、集団執務の場合にとにかくまじまじになりがちであり、これを防ぐために統合が行われているわけである。同じような統合は、次のような語の場合に見られるのである。

基準(規準) 趣旨(主旨) 威容(偉容) 温和(穩和)

そうして、この種の統合を積極的に取り入れているのが表記辞典の行き方である。それは、集団執務の行われているところでこういう統合が行われているとすれば、そのようにして書かれたものが目に触れる機会も多いからである。そうすると、一般にもこの種の統合に従ってよいということになり、従うのが好ましいとも考えられるからである。そうすれば、一人の人が長い文章を書く場合にも、同じような意味で2種類の表記が現れることを防ぐのに役立つからである。⁸⁾

この種の統合が必要なのは、主として漢字音読熟語の場合である。しかし、表記のゆれそのものは漢字訓読語にも見られるのであり、その面から行われているのが、次のような統合である。

出会う(出合う) 肩代わり(肩替わり) 上げ板(揚げ板)

子供(小供) 支払い(仕払い) 幸せ(仕合せ)

また、「同訓の漢字による書きかえ」⁹⁾の中にも、この種の統合が見られるわけである。

穴(孔) 捨てる(棄てる) 分かる(解る・判る)

なお、当用漢字表が漢字の使用を制限したために行われている仮名書きも、

8) この種の表記の統一については、国語審議会の部会報告「語形のゆれについて」の第1部「漢字表記のゆれについて」の中でも取り上げられている。表記辞典が取り上げるのも、このような指針によるものである。

9) 「同音の漢字による書きかえ」は国語審議会報告となっているが、「同訓の漢字による書きかえ」のほうは、そのような形でまとめられてはいない。しかし、この種の書きかえは、昭和23年の当用漢字音訓表審議の際にすでに音訓選定の方針の中に見られたものであり、音訓表の実際への適用に用いられてきたのである。ただし、48年の改定に当たってその行き過ぎが改められたため、48年の音訓表に基づいて用いることが必要である。

この種の統合と考えられるわけである。

いる(炒る・煎る) ひげ(髭・髯・鬚) かぎ(鉤・鍵)

これらは、いずれも漢字訓読語に見られる統合である。

このように取り上げてくると、それでは外来語の場合はどうかということになる。実は、表記のゆれという現象は、外来語においても数多く見られるのである。そうして、そういう場合に統合が必要なこと、次の例に見るとおりである。

レポート(リポート) コンビーフ(コーンビーフ)

レーンコート(レインコート) ゼスチュア(ジェスチャー)

ことに、外来語の表記の場合は、その規範とされている「外来語の表記」が2段階の書き方を分けていることも問題である。¹⁰⁾ そうして、こういう立場で統合を必要とするのが、次のような場合である。

セパード(シェパード) バイオリン(ヴァイオリン)

ホルマリン(フォルマリン) ハンマ(ハンマー)

これらもまた集団執務において統合を必要とするのであり、表記辞典が取り上げる対象となっているのである。

6. 法則的な要素

以上、いろいろと取り上げてきた事柄は、いずれも表記における個々の要素となっている部分である。しかし、広く日本語の表記ということで取り上げる場合、そこには法則的な要素も少なくないものである。そうして、この種の法則的な要素も、また表記辞典の対象となるわけである。

日本語の表記に見られる法則的な要素として重要なのは、現代かなづかい、送り仮名の付け方、外来語の表記などに見られる仮名の用い方である。

まず、現代かなづかいであるが、これは大体系現代語音に基づくかなづかいとしてまとめられたものである。したがって、基本的には現代語音との

10) 国語審議会報告「外来語の表記」の原則の中には、「原音におけるシェ・ジェの音はなるべくセ・ゼと書く。ただし、原音の意識がなお残っているものはシェ・ジェともいってもよい。」のような示し方をしたものが幾つかある。

間に1対1の対応が見られるわけである。これを原則と考えた場合、そのようにならない部分が特に注意を要するわけである。その点で問題になるのが、「じ・ぢ」「ず・づ」「オ列長音のう・お」「エ列長音のい・え」「助詞のは・へ・を」などである。これらについては、該当例の多いほうを原則、該当例の少ないほうを例外と考えて処理することが可能である。¹¹⁾

次に、送り仮名の付け方であるが、このほうは全体が本則・例外・許容の三つから成り立っていて一段と複雑である。しかし、教科書や新聞が用いているのは、これらのうち許容を採用しない送り仮名である。したがって、一般の人の表記の立場では、許容を無視して差し支えないのである。¹²⁾ただし、送り仮名の付け方にも書き分けを必要とする部分が見られること、次に示すとおりである。

赤の組・活字の組み 巻の一・巻きが緩い

期末の手当・傷の手当て 組合の大会・組み合いになる

このような異同が生まれるのは、送り仮名が、名詞は送らない、動詞は送る、という考え方に基づいているからである。その点では、この種の書き分けもまた法則的要素と考えてよいのである。

次に、外来語の表記であるが、このほうは基本的には原音の発音をどのような片仮名で書き表すかという観点からまとめられている。また、その場合の片仮名の用い方に二つの段階があつて、そこにゆれが見られること、前節でも取り上げたとおりである。そうして、このことが、外来語の表記を一段と複雑にしているわけである。例えば、次のような片仮名表記は、いずれも同じ原音に対応するものである。

11) 内閣告示「現代かなづかい」の細則は、歴史的かなづかいの改定という形で定められている。しかし、教育の立場では、発音との関係で「原則と例外」という考え方をしたほうが効果的である。

12) 「義務教育諸学校教科用図書検定基準実施細則」では、許容の部分が用いられていない。新聞・放送などの申し合わせも、これと同じである。ただし、公用文のほうは『「公用文における当用漢字の音訓使用及び送り仮名の付け方について」の具体的な取扱い方針について』において、通則6の許容を適用する部分があり、公用文に用いられている。

ア・ヤ　チ・テイ　セ・シェ　ハ・ファ　バ・ヴァ

しかし、それぞれの片仮名表記をどのように読むかという点では、そこに1対1の対応が見られるわけである。「ア」とあれば【ア】と読み、「ヤ」とあれば【ヤ】と読むのである。したがって、「ピアノ」「ダイヤ」という表記と【ピアノ】【ダイヤ】という発音とを関連させれば、そこに現代かなづかい以上の法則性が見られるわけである。¹³⁾

以上は、仮名の用い方に関する法則的な要素であるが、この種の法則性は、漢字のほうにも見られるのである。ここにその主なものを、それぞれに該当する例とともに示すと、次のようになる。

- (1) 字体の法則性……「ヨ」の形は「急・雪・侵」などに用いるが、「事・君・兼」など縦に貫く画のある場合は、中の「一」が右に出る。
- (2) 筆順の法則性……横画と縦画が組み合わさる場合は横画を先に書くが、「田・王」などの中の部分は縦画が先になる。
- (3) 意味に基づく法則性……はげしい意味のゲキは「激」を書くが、「劇薬」の意味の場合は「劇」を書く。
- (4) 書き換えの法則性……「慾(本来は名詞)」を含む漢字音読熟語は「欲(本来は動詞)」に書き換える。

また、熟語の構成に法則性が見られること、次のとおりである。

- (1) 上の漢字の意味が下の漢字の意味に係るもの……美人 最高
- (2) 下の漢字の意味が上の漢字の意味に係るもの……開店 不動
- (3) 同じ意味の漢字が続くもの……根本 申告 貧乏
- (4) 反対の意味の漢字が続くもの……昼夜 売買 高低

これらはいずれも、漢字熟語の表記を記憶の中に安定させるうえで、大いに役立つ法則性なのである。

13) 表音的な用い方という点では、平仮名よりも片仮名のほうが優れている。片仮名そのものが発音記号として用いられるのも、この一般的な傾向を利用したものである。物音や鳴き声、子供のかたこと、呼び声などに片仮名が用いられるのもそのためである。外来語の表記に片仮名が用いられるのも、基本的には片仮名の表音性を利用したものである。

なお、法則性の強い部分としては、数字の書き方と符号の用い方を見逃すことができない。まず、数字の書き表し方であるが、どういう場合に算用数字を用いるか、どういう場合に漢数字を用いるかということが問題である。

- (1) 算用数字……数量・順序などを表す場合。(「万・億・兆」と合わせて用いる)

1月3日 1周年 世界1周 捜査1課 2,300人 3億円

- (2) 漢数字……和語の数詞、概算の数字、熟語の意味合いの強い場合、固有名詞など。(「十・百・千・万・億・兆」と合わせて用いる)

一つ 一月 一休み 二、三 四、五百人 一般

一昨日 一家心中 二者択一 一周忌 世界一 二重橋

こういう立場で行われるのが、「1万円」と「一万円札」などの書き分けである。

最後に符号の用い方であるが、これには繰り返し符号と句切り符号がある。繰り返し符号は、漢字1字の繰り返しに「々」を用いること、2語にまたがる場合に本来の漢字を書くこと、など、次に示すとおりである。

年々 人々 大学学長 電電公社

仮名のほうは、「あいう・ただ・これこれ・それぞれ」など、そのまま書くのが現代表記の行き方である。

次に句切り符号であるが、基本となるものに次のようなものがある。

まる てん なかてん かつこ かぎ ふたえかぎ

ダッシュ 1字ダッシュ てんでん¹⁴⁾

これらの用い方にも法則性があること、周知のとおりである。

14) ここに掲げたのは、縦書きの場合である。横書きの場合には、このうち「まる・てん」の部分に次の三つの方式が用いられている。(1)「。、」内閣通知「公用文作成の要領」に示されている方式であり、最も一般的である。(2)「。、」一般の欧文の書き方に準じる方式であり、特に科学的なものに用いられることが多い。(3)「。、」自治庁「左横書き文書の作成要領」に示されたため、地方公共団体等で用いられ、一般にもこれに従うものがある。

7. 結 語

このように見てくると、表記辞典にどのような内容が盛り込まれているかということも、ほぼ明らかになったかと思う。表記辞典というのは、要するに表記の立場で問題になる事柄、特に注意すべき事柄を積極的に盛り込んだ辞典である。そうして、個々の漢字だけでなく、個々の語の書き表し方を取り上げていることも、見逃してはならないのである。

ここで何ゆえこのようなことを特に問題にするかという点、それは、表記の学習がとかく個々の漢字を単位とする学習に終始しがちだからである。しかし、実際問題として、漢字を数多く覚えても、それだけでは不十分である。書こうとする文章の中で個々の語の表記として正しく用いることができなければ、全く役に立たないからである。その際に、同音類義語の書き分け、異字同訓漢字の書き分けなどが重要なこと、すでに見たとおりである。それとともに、仮名の用い方も決して軽視できないこと、これもすでに見たとおりである。ただし、このほうはある程度の法則性によってまとめられること、これもすでに見たとおりである。

したがって、表記の学習においては、個々の漢字を単位とするだけでなく、個々の語を単位とすることも必要である。そうして、ある程度進んだ段階では法則的に扱うこと、それも既習知識と関連づけをして扱うことも必要である。この小論が、表記辞典の内容を明らかにしただけでなく、表記指導上の問題点を明らかにした点においても役立つことを、切に望むものである。

参考文献

- 武部良明「明解国語表記辞典」(三省堂)
- 同「新用字用例辞典」(教育出版)
- 同「漢字の用法」(角川書店)
- 同「類語活用必携」(三省堂)
- 文化庁「公用文の書き表し方の基準」(大蔵省印刷局)
- 同「改定現行の国語表記の基準」(ぎょうせい)